

対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす影響についての研究：個人空間の投影法的測定を通して

杉本, 浩利
九州大学大学院人間環境学研究所 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/831>

出版情報：九州大学心理学研究. 1, pp.67-78, 2000-03-10. 九州大学大学院人間環境学研究所
バージョン：
権利関係：

対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす 影響についての研究

— 個人空間の投影法的測定を通して —

杉 本 浩 利

A STUDY ON THE INFLUENCE OF THE ANTHROPHOBIC TENDENCY ON THE ASPECTS OF PERSONAL SPACE

— Through Using Projective Method to Measure Personal Space —

HIROTOSHI SUGIMOTO

In this paper, the author tried to study each sub factors of the anthropobic tendency through examining the differences in the aspects of personal space according to anthropobic tendency. Projective method was used to measure personal space by examining the ideas of "area" and "distance" found in the definition of personal space. Subjects were 39 men and 62 women (19-39 years old) recruited from a lecture in a university and other sources. Analysis 1 examined the changes in each side projective personal space test according to the "acquaintance level" of the other person. Next, to see how these results varied according to the degree of each sub factors of anthropobic tendency, analysis 2 was carried out. From the result, each sub factors of the anthropobic tendency was considered. Above all, it was suggested that the interpersonal distance at the interpersonal scene were not parallel to psychological distance of the person who had high degree of the factor of "the worry that he/she cannot fit into the group" or "the worry that anxious about oneself and other people". Furthermore, it was suggested that the factor of "the worry of cannot control oneself" effects the function of "kanjinsei of high dimension" (Yamane, I., 1987) at the interpersonal sceans.

Key Words: Anthropobic tendency, Personal Space, "area" and "distance", projective method

本稿は、対人恐怖心性の高低による個人空間の諸側面の差異を調べ、その様相より対人恐怖心性各下位尺度について考察を試みるものである。個人空間については、その定義にみられる“領域”と“距離”の概念を取り出すために投影法的方法が用いられた。対象は大学の講義等を利用して募集した男性39名、女性62名(19-39歳)である。分析1として他者の面識度水準(どういう相手がどういう風に振舞っている状況か)によって投影法的個人空間検査に表れる各側面の変化について検討した。さらに、その変化が対人恐怖心性各下位尺度の高低によりどう異なってくるかを、分析2として検討した。その結果より、それぞれの対人恐怖心性下位尺度に

ついて考察を加えた。特に、＜集団に溶けこめない悩み＞や＜自分や他人が気になる悩み＞の高い者は、対人場面における対人距離と心理的距離にズレがある可能性が示唆され、＜自分を統制できない悩み＞は対人場面において「高次の間人性」(山根, 1987)の発揮に関わる因子であることが示唆された。

I. 問題と目的

1. 対人恐怖心性

対人恐怖心性は、対人恐怖症者が感じる不安・悩みは広く日本人一般にも共通する部分が多いとして、日本人に一般的に認められる対人恐怖の傾向のことを言う(小川, 1996, 1997)。

対人恐怖症は「対人関係の場に働く心理的な力に対して過度の過敏さや緊張を示す事態」(穂刈・福田・田中, 1996)であるが、その病理の程度は分裂病から境界例、健常者に近い神経症まで様々にみられ、病態水準に幅がみられることも知られている。鈴木(1982)が「病態としての対人恐怖症が多いというばかりでなく、日本人の多くが対人恐怖心性を秘めている」と述べているように、日本の一般青年にとって、対人恐怖の傾向はかなり普遍的なものであり、病理水準にのぼらないまでも、一般青年は対人関係上に何らかの困難さを抱えながら生活をしていると考えられる。

一般青年の対人恐怖心性を測定する尺度として、小川(1974)は、対人恐怖症者における対人不安の悩みを455項目収集し、一般学生と対人恐怖症を対象とした調査を経て、8因子117項目の「対人不安質問表」を作成した。その後、この尺度は改訂・簡略化が進められ6因子30項目の「対人恐怖心性尺度」として再構成され、一定水準以上の信頼性・妥当性が確認されている(林・小川, 1981; 堀井・小川, 1996, 1997)。

2. 個人空間の定義にみられる“領域”と“距離”

社会心理学・環境心理学の分野では対人場面では人が空間をどう使用するか、どう知覚するかに関わる研究領域は proxemics といわれ、その一分野として個人空間(personal space)の研究がある。

個人空間は Sommer, R. (1959)により「自己を取りまく目に見えない境界に囲まれた領域で、この領域は自我の延長であり、いわば個人と共に移動する“携帯的ナワバリ”である」と定義される。その本来の定義としては自分の周りである自分のものとして経験される空間のことであり、「自我の心理的広がり」(熊谷, 1992)と考えられるものの、個人空間は実験上「これ以上近づいて欲しくない距離」(Sommer, R.)によって測定されることが多い。

しかし「近づいて欲しくない」距離をもって個人空間の範囲とする実験的測定は他者のもつ個人空間の領域を操作的にないものにしてしまうと考えられ、特に熊谷(1992)が指摘するように、他者との相互作用が生じるような場合の個人空間の測定としては疑問が残る。また狩野(1993)は接近者には自分の能動的な接近によって被接近者の個人空間を侵すまいとする相手への配慮が働くとして示唆している。つまりそこには、自分の“領域”があり、他者の“領域”があり、そして自分と他者との“距離”がある。「自分(他者)のもの」として認知される“領域”とは本来の定義にある個人空間である。そして対人場面において自分と他者との“距離”は対人間距離として表出されるが、それは自分と他者との心理的な“距離”が表出されたものとも考えられよう。“領域”とあわせて考えると、“心理的距離”とは“領域”間の距離(もしくは共有)と捉えることもできるだろう。

以上のような視点に立ち個人空間を捉えようと、実験的物理的測定をもって測定されるのは個人空間の表出面(対人距離)であり、“領域”“心理的距離”の側面についてはうかがい知ることにはできず、投影法的な測定が必要であろう。

3. 本研究の目的

対人恐怖心性を有している者は、対人場面において不安を感じやすいと考えられるが、不安傾向の高い者ほど、他人との間により大きな対人距離をとることが知られており(Patteson, A. & Boles, W.E., 1974), 渋谷(1990)は、対人場面での不安を相手に知られたくない、あるいはその不安をさらに増大させたくないという思いが対人距離を大きくしている可能性があることを示唆している。

杉本(1996, 卒業論文)は個人空間を実験的・物理的に測定し、人と関わる場面において「心理的圧力に対する弱さ」(対人不安の一指標)によって距離に差はなく、このことから対人距離には社会的に期待される程度があり、内的には不適合感を感じながらも外的には適応的な距離をとるのではないだろうかと推測されている。すなわち、心理的距離と対人距離にはズレがあるのではないかと考えられる。

本研究の目的は、第一に個人空間を“領域”と“距離”(心理的距離, 対人距離)の二側面から検討することである。個人空間を投影法的に測定をし、また、その場の対人状況により個人空間は変化することが報告されていることから、本研究においても個人空間の諸側面が対人状況に応じてどのように変化するかを探索的に検討する。

第二に、それら個人空間の変化の様相が対人恐怖心性と関連があるのかを検討することである。対人恐怖心性の各下位尺度が個人空間の諸側面に及ぼす影響を調べ、その様相より対人恐怖心性各下位尺度についての考察を試みる。

II. 方法

1. 材料

本研究は以下の検査及び質問紙を分析材料として用いた。

a) 投影法的個人空間検査

渋谷(1987)を参考に、投影法的個人空間検査を作成した。この検査は線画の人物画像が描かれたA4版大の用紙10枚と切り抜きの人物画像9枚から構成された。人物画像は全て被験者と

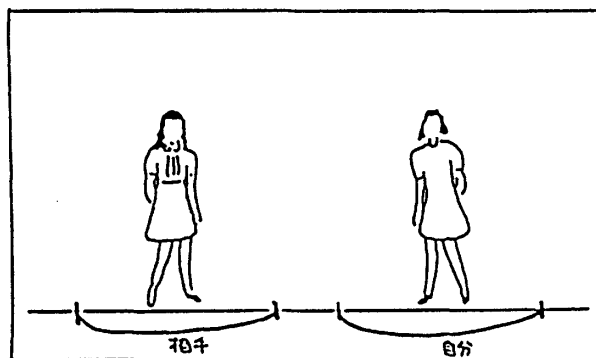


図1 投影法的個人空間検査 回答例(女性用)

同性のものが用意され、人物画像の高さは7.8 cm, 人物画像の下には地平に見立てた線がひかれてある。

まず1枚目には用紙の中央に一人の人物画像が描かれており、この人物画像を被験者の分身とみなして、「自分の領域」について図示するように教示された。2枚目以降には用紙の左端に人物画像が描かれており、この人物画像を「相手」とみなし、切り抜きの人物画像を「自分」とみなし、「相手」に対して「自分」の人物画像を適当な位置にはりつけ、さらにその時の「自分の領域」と「相手の領域」を図示するように教示された(図1)。

なお、それぞれの用紙には対人状況として、どういう相手でどういう状況なのかが、山根(1987)の面識度水準の考えに従い、能動表象3水準×受動表出3水準の合成条件(9条件)で記された。条件の提示順はランダムに配置された(表1)。

山根(1987)によると、他者に対する親密性には自己側と相手側、表象と表出のレベルが考えられ、自己側の行動に示される親密性の表出を「能動表出」、本心として相手に抱く親密性を「能動表象」、相手側の行動に示される親密性の表出を「受動表出」、推定される相手側の親密性を「受動表象」とした。またそれぞれの側面に真他人-知他人-周辺知人-真知人の4つの面識度水準があるとした。しかし、本研究では項目数が多くなり過ぎることを避けるために、真知人、真他人、及び「半知り」である周辺知人

表1 面識度水準の表現

能動表象における面識度水準の表現	
真知人	よく会話をし、私にとって親しみや関心がある人
周辺知人	話したことはあるが、私にとってさほど親しみや関心はない人
真他人	私にとって見覚えがない人
受動表出における面識度水準の表現	
真知人	私に笑顔で声をかけ、親しげな言葉をつけ加える
周辺知人	私に対して表情をくずさずにあいさつだけをしてくる
真他人	私に対して全く気にとまらないかのごとく他人然としている

※条件文の例

能動表象(真知人)×受動表出(真他人)の場合:「よく会話をし、私にとって親しみや関心がある人が、私に対して全く気にとまらないかのごとく他人然としている」

の3水準とした。

本研究では2枚目以降を分析材料として用いる。投影法的個人空間検査において、「自分の領域」「相手の領域」(以下「自分領域」「相手領域」と表記)は人物画像の下の線上に表された範囲を測定した。用紙をはみ出して自分領域、相手領域を図示してある場合は欠損値として扱った。また、自分領域と相手領域の間の距離を測定し、これを「心理的距離」とした。自分領域と相手領域の重なる場合はその範囲を測定し、一の符号をつけた。つまり測定値が正の方向に大きいということは領域間の距離が離れていることを示し、負の方向に大きい(測定値が小さい)ということは領域の重なる範囲が大きいことを示している。さらに向かい合った人物画像の足のつま先からつま先までの距離を下の線上で測定し、「対人距離」とした。

b) 対人恐怖心性尺度

堀井・小川(1996, 1997)が作成した対人恐怖心性尺度30項目が用いられた。回答は、<全然あてはまらない>から<非常にあてはまる>にそれぞれ1点から7点が割り振られ、得点は各項目の得点を合計して求められた。元尺度において<自分や他人が気になる悩み><集団に溶けこめない悩み><社会的場面で当惑する悩み><目が気になる悩み><自分を統制できない悩み><生きることに疲れている悩み>の6因子が見出されている。

2. 対象

大学の講義等を利用して被験者を募集した。データに不備があった者を除外し、分析対象となったのは男性39名、女性62名の計101人(19-39歳、平均年齢:22.4歳)である。

III. 結果と考察

(以下、本研究では能動表象は「能・象」、受動表出は「受・出」と表記する。また面識度水準は真知人:A, 周辺知人:B, 真他人:Cと表記する。例えば能動表象が真知人である場合は「能・象A」と表記する。)

まず分析に入る前に、予備的に対人恐怖心性尺度に対して主因子法による因子分析を行った。固有値を参考に、因子数は4が妥当であると判断し、その因子数のもとでプロマックス回転を行った。共通性等の検討の結果3項目を削除したが、それはいずれも元尺度における<生きていることに疲れている悩み>に含まれるものであった。また、元尺度における<目が気になる悩み>は<自分や他人が気になる悩み>に含まれる形となったが、いずれにせよ他者から見られている自分、自分を評価する他者に対する過剰なとらわれであると考えられるので、<自分や他人が気になる悩み>因子とした。結果、<集団に溶けこめない悩み><社会的場面で当惑する悩み><自分や他人が気になる悩み><自分を統制できない悩み>の4因子を抽出した。4因子までの累積説明率は60.0%であった。(因子

分析結果は紙面の都合上、割愛させて頂く。元尺度の項目については堀井・小川(1996, 1997)を参照されたい。

1. 分析1：他者の面識度水準(親密度)による個人空間の諸側面の変化についての検討

分析1として、投影法的個人空間検査に表される自分領域・相手領域・心理的距離・対人距離が他者の面識度水準によって、どう変化するかを検討する。他者の面識度水準すなわち能動表象(3)×受動表出(3)の2要因3×3水準で、自分領域・相手領域・心理的距離・対人距離を従属変数とし、それぞれ分散分析がなされた(被験者内計画)。

(1) 結果

自分領域においては、主効果、交互作用ともいずれも認められなかった。

相手領域においては、能・象の主効果($F_{(2,190)} = 9.35, p < .001$), 受・出の主効果($F_{(2,190)} = 4.98, p < .01$)がいずれも有意であった。交互作用は認められなかった。(図2) 能・象, 受・出のそれぞれでHSD法による多重比較を行った結果(能・象: $MSe = 3.23$, 受・出: $MSe = 6.67$), 能・象次元では面識度水準が低親密になるほど, 受・出次元では高親密になるほど相手領域は大きくなっていった(以下, 下位検定は全てHSD法による)。

心理的距離において、能・象×受・出の交互作用が有意であった($F_{(4,384)} = 5.23, p < .001$)。(図3)

プールされた誤差項を用い、能・象の水準毎に単純主効果の検定を行ったところ、どの水準においても0.1%水準で受・出の主効果が認められた(能・象A: $F_{(2,576)} = 59.03$, 能・象B: $F_{(2,576)} = 207.68$, 能・象C: $F_{(2,576)} = 297.36$)。能・象のそれぞれの水準で下位検定を行ったところ($MSe = 9.39$), 能・象B, 能・象Cでは受・出の面識度水準が親しい程小さかった。しかし能・象Aにおいては受・出Bより受・出Aが有意に小さかったものの($p < .01$), 受・出B-C間には有意な差はみられなかった。つまり、心理的距離は能・象B, Cにおいては受・出の水準に応じて

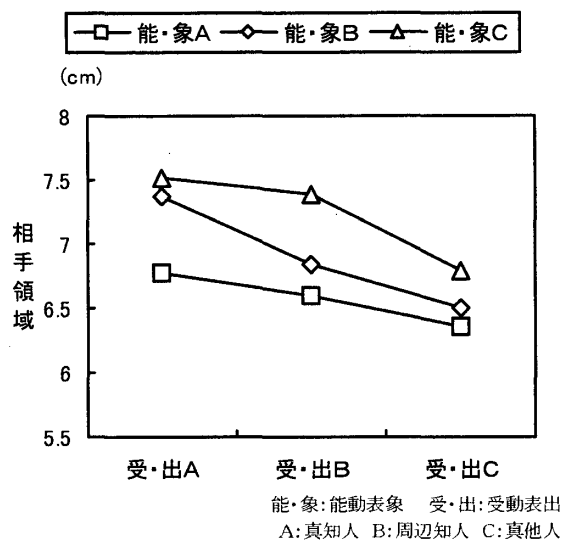


図2 面識度水準による相手領域の変化

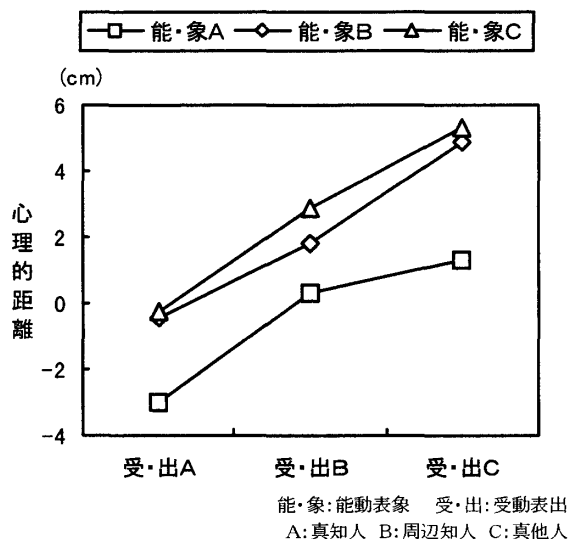


図3 面識度水準による心理的距離の変化

変化するが、能・象Aにおいては受・出Cの場合でも受・出Bのときと同じくらいに心理的距離は近づいていたと言える。

なお、受・出Aのときに心理的距離は負の値を示していた(領域が共有されていた)。

対人距離においても能・象×受・出の交互作用が有意であった($F_{(4,388)} = 8.06, p < .001$)。(図4)

プールされた誤差項を用い、能・象の水準毎に単純主効果の検定を行ったところ、どの水準においても0.1%水準で受・出の主効果が認め

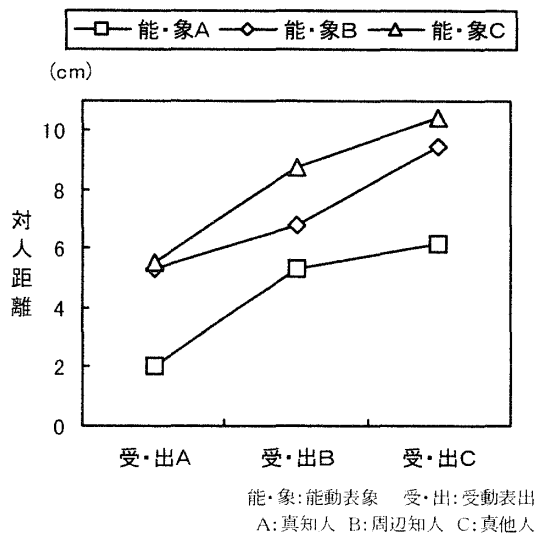


図4 面識度水準による対人距離の変化

られた(能・象A: $F_{(2,582)} = 1016.56$, 能・象B: $F_{(2,582)} = 2495.93$, 能・象C: $F_{(2,582)} = 3266.67$)。能・象のそれぞれの水準で下位検定を行ったところ(MSE=6.27), 能・象B, 能・象Cでは受・出の面識度水準が親しい程小さかった。しかし能・象Aにおいては受・出Bより受・出Aが有意に小さかったものの($p < .01$), 受・出B-C間には有意な差はみられなかった。対人距離のこの変化パターンは, 心理的距離の変化パターンと同様のパターンを示している。

(2) 考察

分析1の結果から個人空間の諸側面について考察をする(分析1の結果を表2にまとめた)。

自分領域においては能動表象, 受動表出の水準によって変化は生じなかった。だが相手領域には能動表象, 受動表出の水準でそれぞれ変化があり, 能動表象の水準では見知らない相手であるほど, 受動表出の水準では相手が親しげに振舞うときほど大きく認識されていた。受動表出とは相手の行動に表される親密性の程度を示すものであり, 相手が親しげに振舞うときほど相手領域は大きくなっていったことから, 相手領域は, 相手が自分に関わってくる積極的態度の表現として認識されていると考えられる。

さらに, 相手領域は見知らない相手であるほど大きく認識されていたが, 相手の領域とは, 相手が所有する“テリトリー”であるとも考え

られ, 知らない相手であるほど, 「それ以上近寄ってはいけない」領域として大きく捉えていると考えられる。

これらから親密性の表現とは別に, 防壁の表現としての意味合いを“領域”が示していると考えられる。同じく“領域”である自分領域も同様の側面を有していると思われるが, 今回の条件文は相手の行動に対しての自分の応対を尋ねるものであったので, 積極的な変化が少なかったのではないかと考えられる。

心理的距離と対人距離は同様の変化パターンを示していた。

まず, 全体的にみると能動表象・受動表出ともに高親密な水準であるほど心理的距離・対人距離は近くなっている。お互いの親密性の程度の表現として距離が近くなったと言えよう。しかし, 分析の結果, 心理的距離・対人距離の変化の様相は能動表象によって変わってることが示唆された。相手が周辺知人・真他人である場合は, 心理的距離・対人距離は相手の受動表出に応じて変化し, 相手が低親密な振舞いを示すほど距離は遠く設定されている。しかし真知人に対しては, 周辺知人的に振舞っていようと真他人的に振舞っていようと心理的距離・対人距離に変化はみられない。つまり, 親しい人なら相手がこちらを気にしていなくても近寄る, というように知人には自我人的(能動表象, すなわち自分が相手に対して持っている親密性に従う), 他人には間人的(受動表出, すなわち相手の行動に表される親密性に従う)に対応していると考えられ, 「高次の間人性」(山根, 1987)が示されていると思われる。

なお, 受動表出が真知人的行動である場合は, 周辺知人的・真他人的である場合に比べ対人距離は急激に近くなっており, 領域も共有されていた。熊谷(1992)は「他者との関わりが生じているときには自己の心理的広がりの中に他者の自己を取り込んでいるはず」と述べているが, 「他者の自己」とは「他者の心理的広がり」と言い換えることができ, 他者との関わりが生じているということはお互いの「心理的広がり」の共有が生じていると考えられる。本研究

表2 分析1：他者の面識度水準による個人空間の諸側面の変化についての検討結果のまとめ

個人空間の諸側面	分析結果
自分領域	面識度水準による変化はなし
相手領域	能動表象次元では見知らない相手であるほど、受動表出次元では相手が親しげに振舞うほど、大きい
心理的距離	周辺知人・真他人に対しては相手の振舞いに応じて変化（親しげなときほど近い） 真知人に対しては相手が真他人的に振舞っていても近い 相手が真知人的に振舞うときは領域が共有されている
対人距離	周辺知人・真他人に対しては相手の振舞いに応じて変化（親しげなときほど近い） 真知人に対しては相手が真他人的に振舞っていても近い （心理的距離と同様の変化パターン）

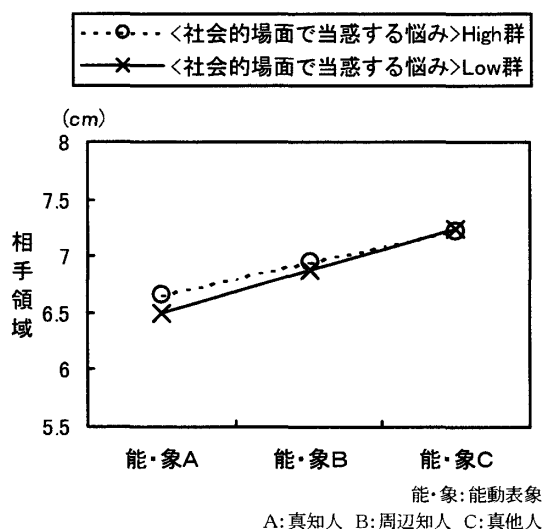


図5 <社会的場面で当惑する悩み> High・Low群別の能動表象水準による相手領域の変化

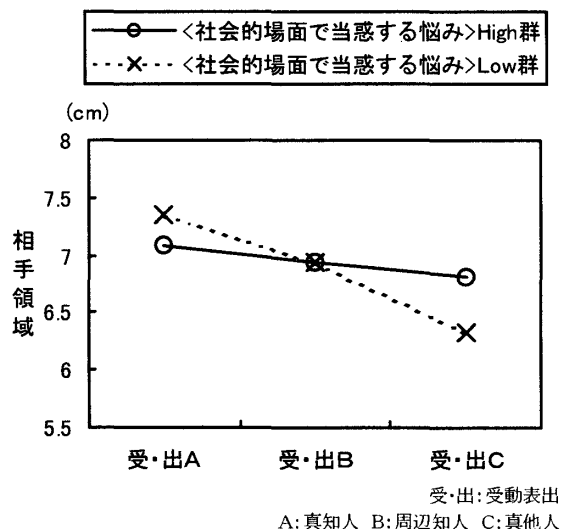


図6 <社会的場面で当惑する悩み> High・Low群別の受動表出水準による相手領域の変化

でも双方の積極的な“関わり”として領域が共有されたのだと考えられる。

2. 分析2：対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす影響についての検討

分析2として個人空間（自分領域・相手領域・心理的距離・対人距離）と対人恐怖心性の関連を探る。被験者は下位尺度毎に平均と中央値を参考にして、それぞれHigh群とLow群に分けられ、自分領域・相手領域・心理的距離・対人距離を従属変数とし、能動表象（3）×受動表出（3）×対人恐怖心性各下位尺度（High群/Low

群：2）の分散分析が行われた（混合計画）。しかし個人空間の能動表象、受動表出の各水準における変化パターンについては分析1と重なるので、分析2では対人恐怖心性の主効果及びそれを含む交互作用がみられた部分に限って分析した。

(1) 結果

<集団に溶けこめない悩み>の影響

心理的距離において<集団に溶けこめない悩み>の主効果(F(1,95)=4.72,p<.05)が認められ、High群において心理的距離を大きくとっていた(High群=2.03, Low群=0.85)。また、自分領

域で<集団に溶けこめない悩み>の主効果の傾向があった($F_{(1,88)} = 3.05, p < .10$, High群 = 6.50, Low群 = 7.31)。

<自分や他人が気になる悩み>の影響

対人距離において<自分や他人が気になる悩み>の主効果の傾向がみられた($F_{(1,96)} = 3.53, p < .10$, High群 = 7.06, Low群 = 6.16)。

<社会的場面で当惑する悩み>の影響

相手領域に能・象×受・出×<社会的場面で当惑する悩み>の二次の交互作用が認められた($F_{(4,376)} = 2.50, p < .05$)。

そこで<社会的場面で当惑する悩み>のHigh群/Low群毎に単純交互作用の分析をしたところ(図5, 6), High群において能・象の主効果のみが有意であった($F_{(2,188)} = 3.39, p < .05$)。能・象において下位検定の結果(MSe = 10.38), 面識度水準が低親密である程, 相手領域は大きかった。

一方, Low群においては能・象の主効果($F_{(2,188)} = 5.85, p < .001$), 受・出の主効果($F_{(2,188)} = 5.81, p < .001$)がいずれも有意であった。さらに能・象, 受・出のそれぞれで下位検定を行ったところ(能・象:MSe = 3.26, 受・出:MSe = 6.67), 分析1の結果と同様に, 能・象次元では面識度水準が低親密になるほど, 受・出次元では高親密になるほど相手領域は大きくなっていった。

<自分を統制できない悩み>の影響

心理的距離において, 能・象×受・出×<自分を統制できない悩み>の二次の交互作用が有意傾向であり($F_{(4,380)} = 2.34, p < .10$), 能・象×<自分を統制できない悩み>の交互作用が有意だった($F_{(2,190)} = 6.12, p < .01$)。

<自分を統制できない悩み>の群毎に能・象の単純主効果の検定を行ったところ, High群($F_{(2,190)} = 20.96, p < .001$), Low群($F_{(2,190)} = 64.65, p < .001$), いずれにも単純主効果が有意であり, さらに下位検定を行ったところ(MSe = 10.38), High群・Low群ともに能・象Aでの心理的距離が能・象B, Cにおけるそれより有意に小さかった。しかし平均値の開きをみると, Low群はHigh群より差が大きく, Low群はHigh

群に比べ, 能・象Aにおいてより心理的距離を小さくする傾向があった。すなわち, 能・象Aとそれ以外を明確に区別していると言えるだろう(図7)。

また, 対人距離において, 能・象×<自分を統制できない悩み>の交互作用が有意であった($F_{(2,192)} = 7.17, p < .01$)。

<自分を統制できない悩み>の群毎に単純主効果の検定を行ったところ, High群($F_{(2,192)} = 64.77, p < .001$), Low群($F_{(2,192)} = 86.15, p < .001$), いずれにも能・象の単純主効果が認められた。さらに下位検定を行ったところ(MSe = 7.27), 心理的距離の結果と同様の結果が得られた(図8)。

この対人距離の変化は, 心理的距離と概ね同様の変化パターンをしていると考えられる。

(2) 考察：個人空間と対人恐怖心性との関連 — それぞれの下位尺度の意味について

分析2の結果に示された対人恐怖心性による個人空間の差異から, 対人恐怖心性の各下位尺度について考察を試みる(分析2の結果を表3にまとめた)。

<集団に溶けこめない悩み>について

<集団に溶けこめない悩み>High群は, 能動表象, 受動表出の水準に関わらず, 心理的距離を大きくしていた。<集団に溶けこめない悩み>とは, 人とのうちとけられなさ, 交際のできなさに関わる悩みである。心理的距離の近さは相手との心理的接触の程度を示していると捉えられるが, <集団に溶けこめない悩み>のために心理的接触・交流を恐れ, 回避した結果であると思われる。

さらに, 傾向差ではあるがHigh群は自分領域を小さくしており, そうした心理的接触の回避は自分領域を小さくすることによりなされていると推測される。

また, この<悩み>は対人恐怖症者によって「集団」に対しての悩みとして語られたものであるが, 今回のような1対1の対人状況でも上述のような結果が認められたことから, この<悩み>の背景には集団に限らず, “人とうちとけられない”ことに関する悩みがあるのではな

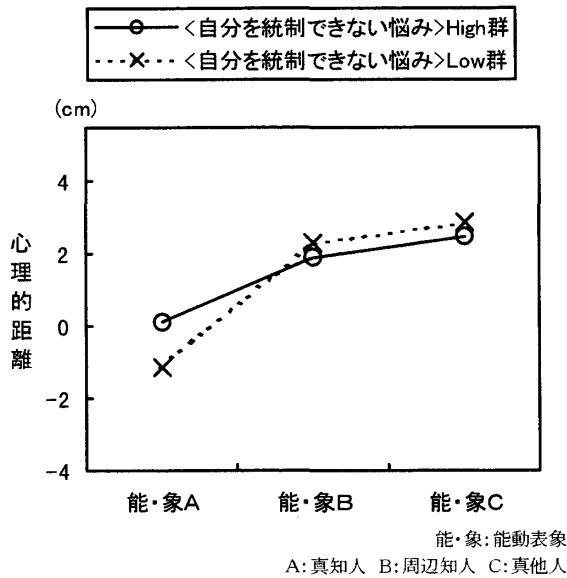


図7 <自分を統制できない悩み> High・Low 群別の能動表象水準による心理的距離の変化

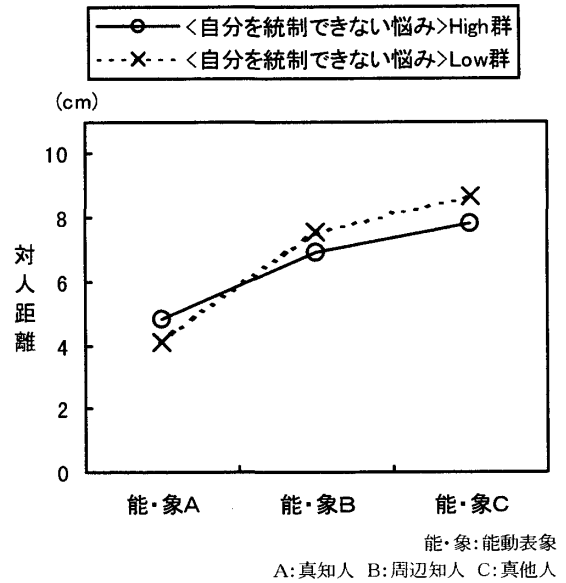


図8 <自分を統制できない悩み> High・Low 群別の能動表象水準による対人距離の変化

表3 分析2：対人恐怖心性が個人空間に及ぼす影響についての検討結果のまとめ

対人恐怖心性 各下位尺度	分析結果
<集団に溶けこめない悩み>	High群は全般的に心理的距離を大きくとる High群は全般的に自分領域を小さくとる傾向 (有意傾向)
<自分や他人が気になる悩み>	High群は全般的に対人距離を大きくとる傾向 (有意傾向)
<社会的場面で当惑する悩み>	Low群は相手領域を能動表象、受動表出に応じて変化 (能動表象次元では見知らない相手であるほど、受動表出次元では相手が親しげに振舞うほど、大きい …分析1と同様)
	High群は相手領域を能動表象のみに応じて変化
<自分を統制できない悩み>	High群・Low群ともに、真知人の場合は周辺知人・真他人に比べて心理的距離・対人距離は近くなるが、その差はHigh群よりもLow群の方が明確

いかと考えられる。

<自分や他人が気になる悩み>について

<自分や他人が気になる悩み> High群とLow群に特に有意な差は認められず、対人距離においてHigh群の方が距離を大きくとる傾向がみられたのみであった。傾向差ではあるが、一方で心理的距離には差がみられなかったことから、<自分や他人が気になる悩み> High群では、相手との交流は感じているものの、それを表出し、親密性を伝えることに抵抗を感じているのではないかと考えられる。これはこの<悩み>が行動上の対人回避傾向につながる可能性を示唆し

ており、まさに“距離をとる”傾向となるのではと推測される。

<社会的場面で当惑する悩み>について

相手領域に変化において、<社会的場面で当惑する悩み> Low群は分析1と同様の変化を示していたが、High群では相手領域は能動表象のみに応じて、すなわち相手の振舞いに関わりなく、どういう相手であるのかのみに影響されていた。能動表象(どういう相手であるか)は個人があらかじめ抱いている対人場面の意味付けであり、受動表出に応じて変化がみられなかったことから<社会的場面で当惑する悩み>をもつ

者は、個人があらかじめ抱えている対人場面の意味付けにとらわれ、その時その場の相手の振舞いによって相手の認知を変える柔軟性に乏しいと考えられる。

＜自分を統制できない悩み＞について

＜自分を統制できない悩み＞Low群は、High群と比べ、よりはっきりと知人とそれ以外を区別して心理的距離と対人距離をとっていた。

言い換えるとLow群は「高次の間人性」がより明快であり、さらに親しい相手には近く、そうでないなら遠くと、“距離”の調整機能がより発揮されているものと考えられる。

このようなく自分を統制できない悩み＞High群・Low群間の違いは、単純な心理的距離・対人距離の大きさの違いというような、量的な違いではない。＜自分を統制できない悩み＞を構成する項目は、他の3因子とは異なり、対人状況から離れた＜悩み＞であり、そこにおいて述べられるのは慢性的な“うまくいかなさ”である。このような“うまくいかなさ”が、対人行動・人との交流において、高次の間人性や“距離”の調整機能がうまく発揮できないという機能不全として現れるのではないかと思われ、さらにこのような自身の抱える機能不全（及び機能不全感）が不適応感を募らせ、対人回避傾向につながるのではないかと考えられる。

IV. 総合考察

1. 心理的距離と対人距離のズレ

本研究では個人空間における“領域”と“距離”の側面を提唱し、対人恐怖心性が及ぼす影響について検討したが、心理的距離と対人距離についてさらに考察を付け加えたい。

まず分析1から、全般的に心理的距離と対人距離は同様の変化をしており、これらは対応するものと考えられる。

また、相手が周辺知人的・真他人的に振舞ってくる場合には領域の共有こそみられないものの、周辺知人・真他人に対して、心理的距離・対人距離は相手が疎遠に振舞う方が大きく、相手を遠くに設定していた。このことはお互い（の領域同士）がより影響を受けあわないようにと

距離を遠く設定していると考えられ、つまりそこに領域があるということによっても影響を受けることがうかがわれる。このことから、例えば距離が一定の場合にも心理的距離を調整することで相手との心理的接触の程度を調整するということも考えられ、市橋（1979, 1981）の言う「スペーシング機能」とはこのような調整能力ではないかと思われる。

また分析2では、＜集団に溶けこめない悩み＞High群とLow群において、心理的距離に差はあるものの対人距離には差は表れてこなかった。この結果は体験（もしくは観念、すなわち＜集団に溶けこめない悩み＞）と行動のズレを示唆するものであり、心の内では心理的接触は回避され、人とのうちとけられなさを抱えながらも、表出上はLow群と同じように距離をとり、その場に応じた行動（適切な距離）をとっているのではないかと考えられる。さらに、＜自分や他人が気になる悩み＞High群では、心理的距離を対人距離として表出することに抵抗を感じているのではないかと考えられた。

これらの結果は表出的には同じように見えても、そこでの体験には違いがある可能性を示唆している。また＜集団に溶けこめない悩み＞＜自分や他人が気になる悩み＞は心理的距離と対人距離にズレがあるという点にも問題を抱えていると考えられる。

2. 今後の課題

測定上の問題から述べると今回の調査において表出とは、条件文であり、また画像間の距離であった。これは検査上で想定された“表象的表出”に過ぎない。また本研究で用いた投影法的個人空間検査は十分に妥当性・信頼性が確かめられてはいない。さらに対人恐怖において「半知り」の状況が問題となりやすいとされているが、本研究では「半知り」（周辺知人）の状況に特徴的な結果は認められなかった。これらのことから、投影法的個人空間検査は実際の対人場面における実感からは離れていると考えられる。

渋谷（1987）によると、投影法による検査はその個人の体験というより、対人関係をどう捉え

ているかという認識や期待を測定しているものと考えられる。となると、投影法的個人空間検査に表されるのは、対人状況の再現というよりも、個人の対人状況の捉え方、すなわち対人状況に対する観念が測定されているものと思われる。

しかしながら本研究の結果より、表出と体験のずれの可能性が示唆され、そこに光をあてるという意味でも、今後、他の測定方法(物理的測定など)との比較、他の尺度(パーソナリティ検査等)との比較により、投影法的測定に表されているものの意味についてさらに検討していく必要があるだろう。

また、「空間の病い」として市橋(1979, 1981)は病理の程度をスペーシング機能の障害により自らのテリトリーを守れないことから論じ、「分裂病者のスペーシング機能は破綻している」と述べている。先述のとおり心理的距離の調整が市橋の言うスペーシング機能に相当すると考えるならば、仮説として、心理的距離の調整の不器用さが神経症水準の病理であり、自分領域自体の破綻によりスペーシングができないのが分裂病の水準ではないかと思われる。

今回の投影法的個人空間検査の限界の一つとして、「領域」を量的な側面で捉えているという点があげられる。距離や領域の大きさからだけではそれがどのような機能を果たしているのか確かめることはできず、また“領域”の共有が親しさと感じられる場合もあるが、浸入と感じられることもある。また本研究から“領域”の共有のある・なしだけでなく、そこに“領域”があるということによる影響もあることが示唆された。

“領域”そのもの(あるいは他者の存在そのもの)の被影響性を示す概念として“領域”の“境界”の強さが考えられる。Fisher, S. (1970)によると、身体境界像がはっきりしない人は、自分があまりに無防備で傷つきやすいと感じられるとされ、また、そうした自分を守るため、より大きな対人距離を必要とすると考えられる(Frede, M.C., Gautney, D.B. & Baxter, J.C., 1968)。個人空間は「自我の心理的広がり」と考えられるが、病理的な個人空間を論じる上で、自我の

強さ(健康度)、すなわち個人空間の強さ(その一つとして“境界”の強さ)にも言及されるべきであろう。

V. 最後に

最後に個人空間の概念を用いて対人恐怖心性・対人関係について論じることについて一言述べたい。本研究の結果・考察は対人関係を空間的な言葉で読み換えた、いわば空間的な比喩を用いたものであり、その点に留意する必要がある。本研究での“領域”“距離”はあくまで検査上に表されたものであり、そして本研究はそれらを用いて対人関係を表現しようと試みるものである。

意味のあいまいな比喩を用いることは概念の混乱をもたらす危険性もあるだろう。しかし、日常的な用語としても空間的な比喩を通して対人関係を表現することは多く、またそれ故に臨床の場でもよく用いられるものである(例えば「距離がとれない」「居場所がない」「間(ま)」など)。本研究は比喩を“真に受けた”研究と言えるが、比喩は人々に共有されやすいものであり、それ故、日常的に語られる言葉の中にも一つの真理があると筆者は考える。日常的に語られる言葉の中で活動する臨床家のみならず、“心”の研究者にとって、日常的な表現のニュアンスについて思いをめぐらせることは、“心”についてより豊かな理解をもたらすと筆者は信じている。

<付 記>

本論文は九州大学大学院人間環境学研究科修士論文を加筆・修正したものである。本論文をまとめるにあたり、多くの方々にご迷惑、ご心配をおかけした。修士論文の頃より暖かく見守り励まし続けて下さった北山修先生をはじめ、お忙しい中、丁寧にご指導下さった高橋靖恵先生、また被験者集めにご協力下さった田中克江先生、そして快く検査にご協力下さった被験者の皆様。他にも多くの方のお世話になりましたが、まずはこの方々に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- Fisher, S. (1970) Body experience in fantasy and behavior. *New York-Appleton-Century-Crofts*.
- Frede, M.C., Gautney, D.B. & Baxter, J.C. (1968) Relationships between body image boundary and interaction patterns on the MAPS test, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32, 575-578.
- Hall, E.T. (1996) *The Hidden Dimension*, Doubleday & Co., New York, (日高敏隆・佐倉信行 訳 1970 *かくれた次元* みすず書房)
- 林 洋一・小川捷之 (1981) 対人不安意識尺度作成の試み, 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.
- 穂刈千恵・福田 周・田中康裕 (1996) 青年期対人不安の実証的研究の今後 — 対人恐怖と境界例の関連性をふまえて, *性格心理学研究*, 4, 38-46.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996) 対人恐怖心性尺度の作成, 上智大学心理学年報 (上智大学心理学科), 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997) 対人恐怖心性尺度の作成 (続報), 上智大学心理学年報 (上智大学心理学科), 21, 43-55.
- Horowitz, M.J., Duff, D.F. & Stratton, C.O. (1964) Body-buffer zone, *Archives of General Psychiatry*, 11, 651-656. (広田君美 訳編 1974 「環境心理学」第3巻 誠信書房 所収)
- 市橋秀夫 (1979) 比較行動学的見地よりみた精神分裂病の精神病理 — ナワバリ行動障害の問題を中心にして —, *精神神経学雑誌*, 81(9), 587-605.
- 市橋秀雄 (1981) *空間の病い 分裂病のエソロジー* 海鳴社.
- 狩野素朗 (1993) 「近づく場合」と「近づかれる場合」及び親密性が個人空間に及ぼす効果, 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 38, 1-10.
- 熊谷信順 (1990) 対人相互作用水準と対人距離の関係, 山口大学研究論叢 第39巻 第3部 27-35.
- 熊谷信順 (1992) 個人空間侵入によって引き起こされる退避行動からみた個人空間の構造, 山口大学研究論叢 第42巻 第3部 1-14.
- 小川捷之 (1974) いわゆる対人恐怖者における「悩み」の構造に関する研究, 横浜国立大学教育紀要, 14, 1-33.
- Patterson, A. & Boles, W.E. (1974) The effects of personal space variables upon approach and attitudes toward the other in a prisoner's dilemma game, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 1, 364-367.
- 渋谷昌三 (1985) パーソナル・スペースの形態に関する一考察, 山梨医大紀要, 8, 41-49.
- 渋谷昌三 (1987) 対人距離の発達の変化に関する投影法的研究, 山梨医大紀要, 4, 52-61.
- 渋谷昌三 (1990) 人と人との快適距離 [パーソナル・スペースとは何か], 日本放送出版協会
- 鈴木睦夫 (1982) 対人恐怖症論の概観 河合隼雄・佐治守夫・成瀬吾策 (編), *心理臨床ケース研究* 4 誠信書房, 144-155.
- Sommer, R. (1969) *Personal Space: The behavioral basis of design*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, (穂山貞登 訳 1972 *人間の空間* 鹿島研究所出版会)
- 杉本浩利 (1996) 個人空間についての研究, 九州大学教育学部 卒業論文
- 山根一郎 (1987) 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析, 57(6), 329-334.